

# 剣道

No. 160

9・10月号

三木市剣道連盟  
広報部  
2012(平成24)年  
11月3日(土)  
発行

- 第59回東播八市親善剣道大会 (1面)
- 小紫名誉会長最高齢で7段昇段 (2面)
- 三木市剣道連指導者講習、中学校新人戦 (3面)
- 植田吉則先生6段昇段に想う (4, 5面)
- 剣道形講習会 (6面)
- 東播高校新人戦 (7面)
- 国際社会人剣道近畿クラブ例会・昇段者 (7・8面)
- ◎本紙は三木市剣連HP (<http://mikikenren2011.web.fc2.com/>)でもご覧になれます。PDFでカラー印刷できます。

## 一本が重かったBチーム ―第59回東播八市親善剣道大会―

暦の上では立秋はとうに過ぎ、お盆の休みも終わったというのに酷暑ともいふべきこの暑さ。ゆうに35度は超えていよう。8月19日(日)、歴史を重ねて59回目の「東播八市親善剣道大会」が西脇市総合市民センター体育館を会場に行われた。

昭和29年に始まったこの大会は、昭和30年には東播五市の大会として、その後六市、七市と増えて現在は加東市を加えて八市の大会になった。発展に伴って、来年度は三本目の優勝旗を新調するという。

当日は恒例の合弓稽古で汗を流し、開会式は10時30分から始まった。参加者は来賓・役員22名、大会役

員67名、審判員46名、補助員40名、選手169名、計344名。

大会会長齋藤幸雄西脇市剣道連盟会長の挨拶や、大会名誉会長来住壽一西脇市長の挨拶などが続き、地元西脇市の村岡選手の選手宣誓で開会式は終わった。

続いて、打太刀、教士七段黒崎護仕太刀教士七段遠藤郁男両氏の日本剣道形の演武があった。

### 栗田良之助先生 銅メダル

試合は11時15分から始まり、最初に男子個人戦が行われた。出場資格は三段以下である。32名がエントリーされている。三木市からは加村友多、谷淵勝巳、稲岡稔博、中谷

忠實、栗田良之助の五氏が出場した。内、加村選手は、西脇の橋本貴明三段を破って嬉しい初勝利。栗田良之助三段は加古川の田中寿幸二段、加西の水田典秀三段、明石の渋谷啓輔三段を次々破ってベスト4、銅メダルを獲得した。

続いて女子三段以下の部、平井敦子、江村直子の2名が出場したが力及ばず上位には入れなかった。

### 大西由記先生頑張る 四段以上の部で優勝



詰り勝ちで高砂の広恒選手を追い詰める大西由記選手

実力者ががひしめく女子四段以上の部ではただ一人三木から出場の大西由記選手(県立吉川高校教員)は、試合経験豊富

な強豪をなぎ倒し、ついに決勝戦へ。高砂市の広恒直子四段を延長の末、コテに切つてとり、初優勝、金メダルに輝いた。



優勝して笑顔を見せる大西選手

各市の名誉を賭けて相争う団体戦は午後から始まり、我が三木市は、は2-1でいずれも敗退して、及ばなかった。

Bチームは籤運に恵まれ、明石市A、西脇市C、加西市Bと対戦。実力者をずらりと揃えた我が三木市Bチームは、加西市Bとは5-0、西脇市Cとも5-0で完勝したが、過去二年間優勝から遠ざかり、リベンジに燃える明石市Aとはがつぶり四つに組んで、互いに譲らず、両者ポイントのない、引き分け勝負で、僅かに次鋒西本のとられたメン一本が決め手となって、入賞の道を阻まれた。まさしく一本の壁に泣いたのだった。なお明石市Aは、高砂市Aの連覇の夢を打ち砕き、決勝戦でも加古川Aを斥けて優勝した。

# 小紫邦夫名誉会長、最高齢で7段合格

## 生涯剣道を率先垂範



続く剣道形の審査では、横浜の教士7段の某氏が打太刀を買って出られ、小紫氏を感激させました。長年、小紫名誉会長の形の相手をつとめてきた森下哲次副会長にお祝いの言葉をいただきます。

### 無欲の勝利を祝福

#### 三木市剣道連盟副会長

森下哲次

去る8月25日(土)、岡山県で行われた全日本剣道連盟主催、剣道7段昇段審査会において、我が三木市剣道連盟名誉会長、小紫邦夫氏が、981名の受審者の内、最後の1組(4名1組)で受審し、見事合格しました。

小紫氏は、相手を引き出し、その出がしらを打ち切って、文句なしの出来栄。最後の立会とあって会場全部が固唾をのんで見守る内、年齢を感じさせない冴えた一打ちに会場から惜しみない拍手が鳴り続けたといえます。

小紫邦夫先生とは、すでに13年の長きにわたり、平均して月に約5回合計15セットの剣道形を打たせていただきました。お互い不備な点は指摘せずに黙々と打たせていただいたことが、このように長きにわたり続けられた大きな原因ではなかったでしょうか。

2千セット以上というとても多い数をこなすことができました。勿論互いに拙い内容であったかもしれませんが、今振り返ってみますと、剣の操法がこの弛まない形

稽古の中から醸し出されたのではないのでしょうか。竹刀による基本稽古や地稽古だけでは得られない心の持ちようや姿勢が生まれた結果の昇段ではなかったか、と心から賛辞を贈りたいと思っています。先生は「生涯剣道」を目指すことを13年目に誓われました。あの時は体を壊され、稽古を中止したこともありましたが、少しでも回復されますと、「今日、稽古をしましょうか?」と誘われることがたびたびありました。そんな気持ちを維持するには、人には考えられない体力との戦いもあったと思いますが、負けん気の強い先生は素知らぬ体で、ただ黙々と形を打たれていました。こちらが「足が痛い。腰が痛い。」と言おうものなら、「若い人が何言うтонねん」と返されると、ぐうの音も出ませんでした。

先生は昨年春の昇段審査以降、体調を崩されたり、入院を繰り返したりして剣道形のお誘いがあり

ませんでした。なんだか寂しい気持ちと、どのように言葉を掛ければよいのやらと迷っていました。手術からやっと回復され、形と稽古を再開されても、体育館の「湿度が高い」などとお聞きするにつけ、相手が誰であれ、稽古を続けてほしいと祈る思いでした。それでも何度自分の体力や気力と戦ってこられたことでしょうか。

小生ごときが感想を述べるのは大変失礼とは思いますが、振り返ってみますと、一昨年頃から時々7段の気位を持った打突で打たれ始めたので、小生も負けじとそれを真似してきました。打たせていただく折の心の持ち方が、我欲から離れ、相手の気持ちに沿いながら打ち据える「悟り」に似た現象を見せていただきました。みなさんもご存じの、これが「剣法十則」の七番目にあたる心構えです。初段から八段までの心の変転は、まさに「鍛練」の一語に尽きます。友人や家族といえども立ち入れない「自分との戦い」です。

先生には頂上まで「鍛練」を続けて頂きたいと願っています。もちろん小生もできれば同道させてほしいものです。



# 三木市剣道連盟指導者研修会に68名が参加

9月2日(日)、三木市立コミュニケーションスポーツセンターで、恒例の三木市剣道連盟指導者研修会が行われ、一般会員約40名、高校生を含め計68名が参加した。本年度の講師には、地元自由が丘在住の伊藤明裕先生(教士7段、兵庫県警察剣道師範)を招聘した。伊藤先生は、6月の東播地区の審



示範をする伊藤先生(左)  
右は安栖先生

判法・稽古法の講習会でも、講師として兵庫県剣道連盟から派遣され、その指導がわかりやすく好評だったことから、指導部が特に懇望してご指導を願ったものである。講習会は午前10時から始まり、午前中に剣道講話と日本剣道形。日本剣道形については、全剣連発行の「講習会資料」に基づき、そ

の注意すべき点を補足説明の重要部分を傍線を入れながら学習した後、実技に移った。



真剣に指導を受ける参加者

午後は、審判法の講話に引き続き、実技指導。高校生が約30名ほど参加してくれていたため、各校対抗の団体試合が組み、一般会員がその審判員として実技を行った。伊藤先生からそれら審判員はもとより、周囲で見守っているそれ以外の会員にも注意、設問があり、会員にはいい勉強の機会であった。午後3時過ぎから約1時間、伊藤先生を中心に合同稽古があり、全員が参加してびっしり汗をかいて無事終了した。午後7時から講師、伊藤先生を囲んで懇親会が「ながさわ」で持たれ、約20名の会員が参加した。

# 平成24年度三木市中学校新人戦剣道の部 個人は今福(自由中)が優勝 自由が丘中、東播大会出場権獲得

9月も末の9月29日(土)、「第47回三木市中学校新人体育大会」が、各競技一斉に行われ、その剣道の部が市立三木中学校体育館で開催された。出場者は全市の中学剣士18名、団体戦は2チームによつて争われる。三木市剣道連盟から審判員として小椋治朗成人指導部長以下13名が参加し、小椋審判長の下、審判に従事した。開会式は、山城三木中学校校長のあいさつで始まり、前年度団体優勝の「自由が丘中学校」チームが優勝カップを返還、主将の今福太一君が力強く選手宣誓した。試合は、個人戦から始まり、男子は3つのリーグで総当たり戦、上位2名がトーナメント戦に出場できる。予選リーグを勝ち上がった者、以下の通り。



自由中今福主将  
の力強い宣誓

十都汰一(星陽中)

決勝戦は三木中中谷琢哉と自由中今福太一で争われ、中谷、場外反則負けで決着した。団体戦で相手大将今福に二本勝ちし、団体戦で唯一勝者になった中谷には悔しい負けであった。

女子は出場が3名のみであり、自由が丘内村友美が他を寄せ付けず優勝した。

団体戦は昨年の覇者、自由が丘中学校が、メンバーを1名欠く三木中を一方的に退け、4-1で勝ち、東播大会出場権を獲得した。

試合後の講話で、安栖敏夫三木市剣道連盟指導顧問から

「気合が不足している。特に立ち会いの気迫が著しく不足していて、これでは剣道とはいえない。腹の底から声を出していない。打った後も声が出ていない。」など厳しい指摘があった。

その講話を受けての、審判員元立ちの合同稽古は、試合した中学生にとつて、多少は厳しい稽古になったかもしれない。

今福太一、鈴木斗麻、横山暖  
(以上自由中)、  
中谷琢哉、吉積  
映良(三木中)、

## 六段昇段に想う 植田 吉則



目の挑戦でようやく初段。小野高では、仙丸喜次先生に剣道の基本的な事柄（姿勢、打つべき機会、

日本剣道形、呼吸法、文武両道等）

について、毎日の稽古を通して繰り返し教えて頂き、二段合格。信州大学時代、長野県では弓道家としても知られる山内成豊先生に剣道稽古法の基本についてご指導頂き、参段は長野剣連より頂きました。地方大学ゆえ、全国各地（東京、大阪、千葉、愛知、岐阜、新潟、長野、石川、富山、福井、京都、和歌山、大分、熊本、福岡、

平成二十四年八月二十六日。岡山会場（桃太郎アリーナ）にて、六段に合格。その瞬間、安栖敏夫先生の「昇段審査は、何やかんや言っても、最後は運です。」の一言が実感を伴って胸に迫ってきました。しかし、最後は運とはいえず、やはり大切なことは、何やかんや言いながらの稽古を自分が今、置かれていく状況の中で、どう積み重ねていくか。そのことにつきますと思っています。

六段昇段に際し、私なりの剣の歩みの一部をここに記させて頂きます。

### ○長かった五段合格までの歩み

三木中時代、藤原淳作先生に剣道の手解きを受け、確か五く六回

等々）地方色豊かな剣道に出会えた貴重な四年間でした。大学卒業後、三木で教職に就きながら、三木市剣道連盟の会員の方々と稽古を重ね、昭和五十九年に四段に昇段しましたが、職場での少年サッカー指導との両立が難しく、しばらく剣道から遠ざかる時期もありました。空白期間は実質十年以上もあったかと思えます。しかし、やはり剣道の持つ奥深い魅力に引き戻され、再出発をして、剣道五段に昇段したのが平成十八年九月神戸の王子道場で実技・形合格後の筆記試験に取り組んでいると、黒田忠夫先生に「満点取るつもりか？」と優しく声を掛けて頂き、周囲を見回すと、残る受験者は私

を含め、二く三人であったのを昨日のように思い出します。中学から始め、五段取得まで四十年かかった計算です。

昨年の夏には六段への修業年限である五年間は経過したものの、稽古量不足は明白。六段受審への自信は無く、ずるずると日が過ぎていきました。仕事の忙しさを言い訳に、稽古量は増えず、このままでは、五段が我が剣道最終段位か？という文字が浮かんだ時もありました。

### ○はじめに目標ありき

そこで、私の取った策は、①稽古量確保 ↓ ②審査申込 ↓ ③合格という順序を逆にするのでした。つまり、①自分が六段に合格した立ち合いを鮮明にイメージとして持つ ↓ ②審査申込 ↓ ③稽古量確保という順序です。これは、邪道かもしれませんが。しかし、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という剣道の理念は、長期目標として堅持しながら、短期目標として「昇段」を掲げ、その達成に向けて計画を練り、それなりの稽古をすることは許して頂ける範疇ではないかと考えました。

### ○合格への稽古計画を立てる

六段を一度も受審したことのない私でも、今の時代、幸いにもインターネットを通じて、容易に審査の様子を知ることが出来ます。繰り返し動画で観ることにより、鮮明にしていきました。そして、イメージができたところ、すぐに審査申込手続きを済ませました。それから、受審当日までの稽古計画を練り上げました。

### ○毎日の基本ルーチンを守る

私には、数年前から、毎日続けている日課があります。それは、朝、目覚めて一番に寝床の上で行う精神統一と、仏壇へのお参り、そして、素振りです。朝食前に行う、この三つのルーチンは、現在、完璧に私の日課となっています。睡眠によって、身体のリセットはできませんが、心のリセットは特に工夫が必要であると思っています。私の場合、朝食前のこの三つの習慣で行います。正しく強い心を目指して、毎朝、初心にもどり、心を鏡に映し、チェックするための